大阪市立大学
大学教育だより

RDHE 2015.3 No.12
Center for Research and Development of Higher Education
ロゴデザイン：吉谷ひかり

大阪市立大学
大学教育研究センター
〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138
（全学共通教育棟5階）
http://www.rdhe.osaka-cu.ac.jp/

これまでの記事は http://www.rdhe.osaka-cu.ac.jp/publications/index.html から読めます

大学教育だより No.12

Voice～学生の声 ● 商学部と生活科学部（研究科）の学生交流と意見交換会
Campus Inquiry ● ウチの学部・研究科・センターではこんな教育を行っています！ 経済学部・経済学研究科／法学部・法学研究科／理学部・理学研究科
OCU Education News ● 市大教育ニュース！ 副専攻制度／English Café
Center Now & Human ● 大学教育研究センターの活動・研究・スタッフ紹介

アン ロゾ（Un roseau）No.16：縦書き部分

● 井上 徹 先生（副学長・教務担当部長） ● 鳥生 隆 先生（工学部・工学研究科）

Voice ～学生の声

商学部と生活科学部（研究科）の学生交流と意見交換会

―食育に関する実践型学習を通した学びと地域貢献―

2014年12月1日に、商学部と生活科学部研究科の有志が集まり、食育活動を通した学びと地域貢献に関して意見交換を行いました。

意見交換では、まず商学部の学生が、1年次の実践型授業「キャリアデザイン論」で企画した内容を発展させ、2013年8月13日に「あべのキューズモール」で辻調理師専門学校の生徒さんたちと共同で実施した大阪産（もん）食育イベント「あべの　おやこらぼ」について報告し、次に生活科学部の学生が、中学生とその保護者を対象に実施している「思春期を対象とした食教育プログラム」について報告した後、大学の外で行った実践型教育の難しさや学んだことに関して活発な議論がなされました。

■ 意見交換会には、商学部からは、3回生の学生3名、生活科学部・研究科からは、4回生の学生2名と大学院修士課程2回生と1回生の院生各1名ずつ合計4名が参加してくれました。教員は、生活科学研究科の春木敏先生と千須和直美先生、および大学教育研究センターの兼任研究員でもある経営学研究科の小林哲先生、同センター専任研究員の飯吉弘子先生が参加しました。

■ 商学部学生企画「あべの おやこらぼ」

最初に、商学部の学生の皆さんに「あべの　おやこらぼ」に関して報告してもらいました。概要は以下の通り。

- ●大阪の地元野菜ブランド「大阪産（もん）」を使った子どものお菓子作りイベント。食育を通した親子の絆づくりと大阪産の普及が目的。
- ●あべのキューズモール3F の「パティスリー・ラボ・ツジ」で、2013年8月11日（日）に開催。

Voice ～学生の声

商学部と生活科学部（研究科）の学生交流と意見交換会

●辻調グループの辻製菓技術研究所とのコラボ・イベント。辻製菓技術研究所の研究先生が、お菓子のメニュー作りと当日の先生役を、市大商学部の学生がイベントの全体企画、農家からの大阪産の調達、そしてイベントのPR を担当。
●本イベントは、商学部が提供しているワークショップ型授業「キャリアデザイン論」（1年次提供科目）の課題である「キューズモール・スマイル・プロジェクト」の企画がもとになっている。
●しかし、実施されたイベントは、キャリアデザイン論の企画案とは別のもの。実施段階で様々な制約があり、企画案をもとに新たなイベントを模索。また、辻製菓技術研究所とのコラボや農家からの大阪産の調達も結構苦労した。
●その甲斐あって結果は好評。子どもたちは本格的なお菓子作りを体験し、親御さんにも大阪産をPR できた。

【春木】イベントの参加者数はどれぐらいか。
【商：学生A】1回が12組（24名）で、2回行ったので計24組。倍以上の申込があり抽選で決定。小学生を対象としたが、作業台の都合で身長制限を設けた。
【春木】皆さんの役割分担はどのようなものでしょう。
【商：学生B】企画全体の論理的な組み立てをA君が、プレゼン資料等のコンテンツ作成を私が、そして、C君はプレゼンを主に担当。
【商：学生C】本日皆さんに配ったプリントは、大阪産を知ってもらうために当日配ったもの。イベントが始まるまで待ち時間が結構あり、その間、楽しく待ちながら大阪産について知ってもらうため「間違い探しゲーム」にした。間違い探しのアイデアは、サイゼリアのキッズメニューを参考にした。
【商：学生B】それと、親子の絆を深めるツールとしてイベントの記念となる冊子を作成。その冊子には、子どもがひとりでお菓子を作ったことを称える表彰状とともに、チェキで撮ったお菓子を持った親子の写真を添付。親から子どもへのメッセージを書く欄も作った。
【春木】お菓子の出来栄えはどうだったか。
【商：学生C】メニューがなかなか確定せず心配したが、お菓子自体は素晴らしかった。さすが世界の辻調理師専門学校だと思った。
【春木】先生のアドバイスはあったか。
【商：学生B】結構あった。キャリアデザイン論の先生は、実務家でイベントのプロ。学生だけだとどうしても甘くなる。また、企業の人からのダメ出しも多く、ポスターだけでも16回やり直した。

■ 生活科学部研究室実習「思春期を対象とした食教育プログラム」

次に、生活科学部の学生さんから、学部生がかかわっている「思春期を対象とした食教育プログラム」について報告してもらいました。概要は以下の通り。

●思春期（中学生）を対象とした食健康プログラム。生徒だけでなく保護者も対象としている。
●中学生は、生活習慣が大きく変化し、朝食欠食や過度のダイエットなど食生活に乱れが生じる。しかし、生活習慣は家庭環境に影響される部分が大きく、本人が問題を自覚しても、家族の協力がないとなかなか改善できない。保護者（家族）も対象としているのはそのため。
●生徒のプログラムは、保健体育科の授業を中心に実施。3年間のプログラムで、自分自身で健康管理が出来るようにすることが目的。具体的には、1学期に生活習慣病について学び、夏休みの課題として生活習慣病防止のポスターを作ってもらったり、雑誌の食やダイエットに関する記事について議論したりする。
●私たちの役割は、この保健体育科で行う授業内容を、現場の先生たちと意見交換しながらつくること。ゲームを取り入れるなど生徒が楽しみながら学べるよう工夫している。
●保護者のプログラムは、食育講座の実施。年3回行っており、今年は、朝食、昼食（弁当）、夕食が各回のテーマ。家庭での実践につながるようリーフレットを作成し、レシピを紹介。食育講座も生徒の授業と同様、結構盛り上がる。
●食は、単に体の健康のみならず、学力の向上や健全な自尊感情の形成に大きく影響。その意味でも、思春期の食育は非常に重要だと思う。

【商：学生B】どの地域で実施しているのか。
【生：学生D】東大阪市の中学校。生徒のプログラムは1校。保護者のプログラムは2校で実施。
【商：学生A】現在、下宿生活をしており、自分の食生活が乱れていることを実感した。ただ、自宅にいたときはそれほどでもなかった。今の中学生は結構乱れているのか。
【生：学生D】それほど乱れているとは思わない。ただ、問題がなくても、この時期に何が健全な食習慣かを知ることは重要だと思う。思春期は種まきの時期。
【商：学生A】ある意味で、食を通した健康リテラシー教育だと思った。今の自分を考えると重要だと思う。
【商：学生B】保護者の食育講座だが、食に関心のない人は参加しない。しかし、本当に食育が必要なのは彼らではないか。どうやって関心のない人を参加させるのか。
【生：学生D】それが大きな課題。現在は、生徒が家庭に持ち帰る食育通信がその手段。

■ 意見交換（望ましい食のあり方）

【商：学生C】報告を聞いて、同じ食育という言葉を使いながら内容はまったく違うと感じた。特に、栄養学的にきちんと考えているところが生活科学部らしいと思った。
【生：学生D】プログラムで使用しているのが、アメリカの「フード・ガイド・ピラミッド」。ピラミッドの体積が必要摂取量を表す。ご飯やパンなどに含まれる炭水化物の必要摂取量が最も多く、次に野菜や果物でビタミン・ミネラル。肉や魚などのたんぱく質食品よりも野菜や果物の必要摂取量が多くなっているのが重要なところ。

【商：学生C】直観的でわかりやすい。
【春木】大阪府の野菜摂取量が、全国で最も少ないことが課題である。
【生：学生E】保護者の食育講座の参加者は延べ60人程度だが、彼らの朝食のスケッチを見ると、ウィンナー、ハム、目玉焼きなどたんぱく質食品の摂取量が、野菜や果物よりも多い。
【商：学生A】野菜の価格が高いことも、摂取量の少なさに影響しているかも。
【商：学生B】野菜の代わりに野菜ジュースでも大丈夫か。
【生：学生D】フード・ガイド・ピラミッドでは、野菜ジュースは野菜に含まれない。ただ、日本の「食事バランスガイド」は、野菜ジュースが野菜に含まれる。一概に判断するのは難しいが、教育上は別として扱うのが良いと思う。

（食育に対する関心）

【小林】商学部の企画はもともと食育ではなかったとのこと。なぜそれが食育になったのか。
【商：学生C】企画が採用されるには課題提供者であるキューズモールにとって魅力的であることが重要だった。食べ物をテーマにしたイベントはどこにでもある。そこで単なる食べ物のイベントではなく、教育的意義すなわち社会貢献をアピールした方が魅力的な企画になると思ったのが、食育をテーマにした理由だ。
【春木】お客さんの関心は高かったか。
【商：学生C】多数とは言えないが、食育に関心を持つ人は確実に存在すると思った。
【小林】今日参加されている生活科学部・研究科の学生さんたちは、食育を研究テーマとしているが、それを研究しようと思った理由は。
【生：院生F】私は4人兄弟姉妹で、家族揃って食事をするのが普通だった。しかし、周りを見るとそうじゃない人が多く、それに衝撃を受けた。食事は家族の要であり、食育を通して良い家庭を作ることができると思ったのがきっかけ。
【生：院生G】私は小さい頃好き嫌いが多く、特に牛乳が嫌いだった。それが原因か中学生のときに骨折し、食に興味を持つ。自分の経験から、必要だから食べるのではなく、美味しく（楽しく）食べて健康になってほしいと思い、食育研究を志すようになった。
【生：学生E】私は親があまり料理をしなかったせいか、自分で作るようになり、料理が好きになった。作った料理を喜んで食べてほしい。それが食育研究に興味をもったきっかけ。また、食育は人間が相手なので難しい部分もあるが、その分喜びも大きい。
【生：学生D】私は、管理栄養士の資格を目指しているが、単に美味しく健康によい料理を作るだけではなく、それを相手に伝えることが必要だと思ったことが食育研究を始めた理由。食に関心を持ってほしい。先ほど話したように、なかなか難しいが‥‥。

（食に関心がない人へのアプローチ）

【小林】食に関心がない人にどうその重要性を伝えるか。商学部の学生ならどうするか。
【商：学生C】ゲーム性を取り入れて楽しく学べるよう工夫する。
【小林】来ない人はどうするのか。
【商：学生A】強制的に来るよう仕掛ける。
【商：学生C】禁煙推奨の広告のように（笑）。
【生：院生F】保護者ではなく中学生本人に働きかけることも大切。たとえば、朝食を食べてない子は、とりあえず何か食べるようにする。ひとつ上の健康を目指す。
【生：学生E】私たちは、現在、食や健康を研究しているので、必然的に食に対する関心が高くなっている。しかし、保護者はそうではない。そのギャップをわかった上で、食の大切さをアピールすることが大切だと思う。
【商：学生A】大学生も同じ。食に対する関心は結構低い。
【商：学生B】効果が見えにくいのも、食に対する関心が低い原因のひとつだと思う。頭ではわかっているが、なかなか実行できない‥‥。

（実践力を高める）

【千須和】商学部の報告を聞いて、2回生でそれだけのものを企画できるのがすごいと思った。どうしたらそうなれるのか。
【商：学生A】商学部で学ぶことのひとつは、組織を動かし、人を動かすこと。企画を実行に移すには、多くの人の助けが必要となる。
【商：学生B】チームが良かった。互いに補うことで、一人では実行できないことがチームだと実行できる。各々の得意分野を活かせたことが大きいと思う。
【商：学生C】最初から上手く出来たわけではない。1日に5回怒られたこともある。よく徹夜もした。大学の外での活動なので社会的責任もある。企業の人も本気。こちらも本気でやらなければならない。
【商：学生A】コンプレックスも大切。何とか成功して見返してやりたいなど動機は何でもよいが、諦めない気持ちが必要だ。
【商：学生B】強制的に放り込まれないとやらない。机の上の勉強も大切だが、実際に行うことで得られる知識もある。キャリアデザイン論は、強制的にそれを行うよい機会だったと思う。

［交流会を終えて］

今回のVoiceは、商学部と生活科学部の学生に、彼らが主体となって行った食育に関する活動について報告してもらい意見交換を行いました。同じ食育をテーマにした活動ながら、学部の特色が出た内容となっており、非常に興味深い交流会でした。思ったのは、互いに協力し合えば、両方の活動がより良くなりそうだということ。学部間の交流が有意義であることを改めて実感した次第です。最後に、意見交換会を行うに当たり、協力いただいた多くの方に感謝いたします。ありがとうございました。

（経営学研究科　小林 哲）

商学部と生活科学部の学生が取り組む食育には、学部特性が明らかにみられました。商学部は、“商業”として、生活科学部は、“教育”として成り立つようにかつ、両者とも食育を受ける人たちが、“ヘルシーに、豊かにそして、ハッピーに”なることを願って、一生懸命に取り組んだ熱意が手に取るようにわかり、楽しい食育交流会となりました。

それぞれの社会的役割を学生のみなさんがよく理解し、咀嚼し、食育を受ける人（このたびは、こどもと保護者）にむけて、食の楽しさ、大切さを実感し、日々の食生活に活用していくよう、しっかりと活動され、大学の社会的役割を担われたことは頼もしく、次は、どのような食育をみせてくれるかと期待しています。

昨日、今日、みなさんは、ヘルシーで楽しい食生活を送っていますね!?

（生活科学研究科　春木 敏）

文責：大学教育研究センター兼任研究員　経営学研究科准教授　小林　哲

これまでの記事は http://www.rdhe.osaka-cu.ac.jp/publications/index.html **から読めます**

Campus Inquiry

ウチの学部・研究科ではこんな教育を行っています！

経済学部・経済学研究科

スチューデント・アシスタントの効用

スチューデント・アシスタント試行のきっかけ

経済学部では双方向型の演習授業であるイノベーティブ・ワークショップ（以下、I・W）を1・2回生を対象に開講しています。このI・Wは教員と学生の間のコミュニケーションだけではなく、学生同士の間のコミュニケーションをいかに活発にするかが授業の成否を決めるといっても過言ではないと考えています。つまり、少人数のグループワーク型の授業を形式的に取り入れることが重要なのではなく、いかに活発な雰囲気を作り出せるかが重要だと思うのです。

写真1：奥の女性が4回生ゼミ生

一方で、私自身が教員歴を重ねるにつれて（正直に言うと歳をとるにつれて、ですが）、私自身と1・2回生の学生との感覚のギャップに苦しんでいます。そこで、数年前から、私はこのI・Wの授業に4回生の専門演習（ゼミ）の学生2名にアシスタントをお願いして、一緒に授業をつくっています。具体的には、1名の4回生ゼミ生にI・Wの4つのグループ（I・Wは定員16名の演習授業）のうち、それぞれ2つのグループのアシスタントを担当してもらい、グループワークの輪に参加してもらうのです。

写真2：奥の男性が4回生ゼミ生

この試みによって、確かに学生間のやり取りの雰囲気は改善されました。1・2回生の学生はグループでの議論の仕方に慣れていません。そこに、教員よりも身近でかつ議論の経験もあり、また過去に失敗なども多く経験している先輩が輪に加わることで、よりスムーズな議論が可能となりました（ただし、1・2回生の考える余地を考慮して、4回生には議論の中心にならないようにと強く要望しています）。

写真3：授業最終日の集合写真　前の2人が4回生ゼミ生

ポイントは教員と4回生アシスタントとの信頼関係強化

しかし、この試みで改めて気付いたことがあります。それは、教員と学生との密なやり取りの重要性です。しかも、その学生とはこの場合でいえば、4回生のアシスタントとの密なやり取りです。4回生は誰でも良いわけではありません。2年間のゼミでの関わりのなかで、誰がリードする力があるか、聞く力があるか、また下の学年から慕われているか、そもそも下の学年に関心をもっているか、などを探らなければなりません。また、毎回の授業後に反省と次回への課題を話し合わなければなりません。でも、こうした毎回のやり取りが私自身と4回生のゼミ生との間のコミュニケーションをより充実したものにしてくれます。4回生は毎回の授業後に、1・2回生と関わる難しさを訴えてきます。そして私も同じ悩みを打ち明けます。そうすることで共通の課題が生まれ、それに対してどうすればいいかを真剣に4回生とやり取りします。こうした一つ一つの真剣なやり取りが、授業の成否に繋がってきます。また最終的には、私と4回生のゼミ生との間の信頼関係を強くしてくれます。

アシスタントは教員の仕事を楽にする手段では必ずしもないと思います。むしろ本来的には手間を生むことだと思います。しかしその手間をかけることが、結局は授業の成否に繋がり、ひいては学生との信頼関係を強くして、「やりがいのある仕事」になっていくのだと考えています。

経済学研究科　准教授　松本　淳

学部研究科 教育・FD 紹介

Campus Inquiry

ウチの学部・研究科ではこんな教育を行っています！

法学部・法学研究科

法学部の演習授業 ― 基礎と専門性 ―

（1）法学部では、豊かな発信能力と法的思考力（リーガルマインド）を持つ人材育成を目的に掲げ、教育活動を展開しています。法学部教育の中心となるのは、オーソドックスな形式で行われる「講義」であり、科目によっては大教室で行われることもあります。講義とならんで、法学部教育で重要な位置を占めるのが「演習（ゼミナール）」です。講義は一般的にイメージしやすいので、以下では、法学部の演習授業を紹介します。

（2）演習の大きな特徴は、少人数教育にあり、法学部では、「基礎演習」、「専門演習」、「外国語演習」の３種類の演習授業が開講されています。このうち、「基礎演習」は、１年次前期に提供されるもので、１回生全員を少人数のクラスに分け、クラスごと異なる法学部教員が授業を担当します。例えば、2014年度は、７名の教員がそれぞれ１クラスの基礎演習授業を担当しました。基礎演習は、近年重視される初年次教育として法学部が独自に実施しているもので、法学部に入学してきた１回生が、とくに１年次後期以降の専門教育にスムーズに適応できるよう、法学・政治学の基礎を、少人数の演習形式で学んでいくものです。担当教員の専門分野は様々ですが、この先４年間、大学で専門を勉強していくための基礎的な力を養ってもらえるよう、１回生全員が共通して必要となる法学・政治学の基礎を身につけるための共通部分と、各教員の専門や個性を生かしつつ進められる部分とから構成されています。共通部分としては、たとえば、全員に向けた講演会や映画鑑賞会などのプログラムが実施され、また、複数の教員が協力して作成した共通教材が活用されています。このような共通のプログラムの一方で、各教員が創意工夫により色々な法学・政治学の基礎的な素材を取り上げ、それに関連して学生が自主的に調べたことを報告し討論するかたちで授業が行われます。基礎演習では、授業を通じて、学生が、文献・資料を調査分析する能力を身につけ（クラスごとに書評コンクールと優秀者の表彰も行っています）、発表やディベートなどのコミュニケーション能力を磨き、また、一緒に勉強していく仲間を見つけ、教員と学問的な関係を築きながら、法学・政治学を専門的に学んでいくために必要な力を養うことが目指されています。

（3）１年次前期の「基礎」演習に対し、３回生、４回生になると、「専門演習」が開講されます。専門演習は、必修科目で、法学・政治学の様々な分野から、学生各自が自分の関心に従って選択することができます。ちなみに、2014年度は約20の演習科目が開講されています。各演習の定員は、原則として15名以下となっており、関心を同じくする学生同士が集まって、担当教員との間で、あるいは学生相互間で議論し、より高度な専門性とコミュニケーション能力を養います（なお、2014年度からは、学年の隔てなく専門学習意欲の高い学生のニーズに対応すべく、２回生にも専門演習を枠外単位として開放しています）。

専門演習では、それをどのような演習にするかは、まさに担当教員の腕の見せ所です。科目によっては、もっぱら文献資料に基づく考察を行うものもあれば、法学・政治学の理論と社会の実際や実務を架橋するための様々な実践をしているものもあります。ここでは、後者の一例として、恒光徹教授の「刑事政策演習」を紹介します。本演習で、恒光教授は、「人道的で科学的な刑事司法制度の探求」を目指されます。刑事司法は、刑事裁判、懲役・禁固刑などの刑罰の執行をはじめとする広範な対象を包摂する概念です。演習では、まず、文献の精読と議論を通じ、刑事司法に関して現在議論されているテーマ（たとえば、被疑者取調べの可視化）について考え、次に、刑事司法関連施設の見学を通じて、現代の刑事司法の動態の理解を試みます。具体的には、刑事裁判を第１回公判から判決言渡しまで傍聴し、レポートにして全員で１冊の報告集をまとめたり、刑務所、少年院、更生保護施設などを見学したりするそうです。施設見学を通じて、罪を犯した人がどのような人間なのかを直に感じ、考えてほしいというのが、恒光教授が望んでおられることであり、この人間像が刑事司法のあり方を考えていくための重要な鍵となります。

（4）このような専門演習のほかにも、法学部では、さらに外国語演習（英・独・仏・中）も開講し、外国の法や政治制度を原書で学ぶ機会を提供しています。また、３年次後期からは、「特別研究」という形で大学院レベルの授業を受講する道も開かれています。法学部では、これらの演習や少人数授業を通じて、最終的に、豊かな法的思考力を備え、主体的に問題を発見し、自分の考えを社会に発信できる能力を身につけた人材の養成が目指されています。

＊本稿の執筆にあたりご協力くださった恒光先生にこの場をかりて御礼申し上げます。

大学教育研究センター兼任研究員　法学研究科教授　髙田　昌宏

学部研究科 教育・FD 紹介

これまでの記事は http://www.rdhe.osaka-cu.ac.jp/publications/index.html から読めます

Campus Inquiry

ウチの学部・研究科ではこんな教育を行っています！

理学部・理学研究科

日韓院生による国際研究交流と異文化交流 ― 日韓大学院学生数学ワークショップ

日韓大学院学生数学ワークショップ

理学研究科数物系専攻数学分野では、2007年から韓国・慶北国立大学、釜山国立大学、大阪市立大学の3大学の大学院学生を主体とするワークショップ「日韓大学院学生数学ワークショップ」を開催しています。第1回は慶北大BK21・釜山大BK21・大阪市立大21COE合同ワークショップとして、大阪市立大学学術情報センターを会場として開催され、以降、日本と韓国で会場を交互にしながら現在に至っています。本年度は第8回となりますが、夏の盛りの2014年7月21日から7月24日の4日間にわたって、韓国・大田（Daejeon）にある韓国国立数理科学研究所（NIMS, National Institute for Mathematical Science）において、

日韓双方から修士・博士課程学生20名ずつが参加し、国際研究集会「TAPU-KOOK Joint Seminar」の聴講、および院生ワークショップでの15分間の英語による研究講演を行いました。

参加学生の中には、何度も国際研究集会で発表したことのある博士課程学生もいますが、本格的な国際研究集会の参加は今回が初めてという国際経験のあまりない学生が多く、例えば本年度は大阪市大からは5名の修士1回生、5名の修士2回生が参加し、自分の研究分野の講演を初めて英語で講演するという体験をしました。最終日午前の講演終了後には、ワークショップ組織委員会から、優秀若手数学者賞（Award for Young Mathematicians）、最優秀プレゼンテーション賞（Award for Best Presentation Excellence）の授賞式があり、本学からは計4名の博士課程学生が受賞の栄冠に輝きました。

ワークショップと同時開催された「TAPU-KOOK Joint Seminar」とは、TA＝大邱、PU=釜山、KOOK＝神戸、大阪市立、大阪、関西学院の各大学の一線の研究者による結び目理論に関する国際研究会議で、特に結び目理論や低次元位相幾何学を専門とする学生にとっては、最先端の研究動向に触れることのできる貴重な機会であり、意義深いものでした。

数学を通じた異文化交流の実践の場

「日韓大学院学生数学ワークショップ」での主たる言語はやはり英語です。数学は言語の壁を越えた学問という側面も持ちますが、自分の意図するところを数式だけでなくニュアンスを込めて聴講者に伝えるためには、英語能力の涵養は欠かせません。日本側からの参加学生の中には、韓国学生の英語能力の高さに発奮し（または圧倒され）、数学だけでなく英語での発表スキルの向上を心に誓うものもいました。

またこのような国際研究ワークショップの楽しみの一つは、異なる文化背景を持つ同年代の学生同士の交流にあると思います。最終日午後には、会場である大田からバスで1時間程度の歴史の町全州（Jeonju）に遠足に出かけ、名物の「全州ビビンバ」を楽しみ、また700軒余りの韓国伝統家屋の

集まった「全州韓屋村」を観光しました。これらの学生同士の交流の中で、お互いの文化についての理解と尊敬の念が確実に育つことでしょう。韓国では数学専攻の女子学生の比率が高く、学部生では7割強程度とのことです。今回の韓国側からの参加者にも女子学生が多く、ほぼ半数が女性だったことも付記しておきます。

「日韓大学院学生数学ワークショップ」は、日韓大学院生双方に、異文化交流・研究交流の貴重な実践の場を提供しているといえます。

大学教育研究センター兼任研究員　理学研究科　教授　高橋　太

学部研究科 教育・FD 紹介

大阪市立大学　副専攻制度発足

大阪市立大学は、2015（平成27）年度より、主専攻（それぞれの学部・学科で修める学位）に加えて、さらに広く、深く、自発的な学修をすすめたいと考える学部生を対象に、ふたつの副専攻を設立します。意欲と能力と余力があり、各副専攻の要件を満たす方ならば、学部を問わず履修することができます。

詳しくは、入学手続き書類に同封されている「副専攻ガイド」をご覧ください。

GC（Global Communication）副専攻

●目的　：不確実な社会で生き抜くことのできる語学運用能力とグローバルマインドを涵養する
●キー演習　：GC 総合演習 ※1年次後期～2年次
●キー海外研修：GC_Int（GC 副専攻専用カナダビクトリア大語学研修）
※1年次後期、学年末実施予定
※成績優秀者・語学運用能力上位者には研修費支援制度あり

今年度の正式登録者募集は7月です。2015（平成27）年度入学の1回生のみ副専攻に登録できます。希望者多数の場合は、各種語学力テストのスコアに基づいて選抜が行われます。
登録希望者向けガイダンスについては、全学ポータルサイトおよびチラシにて事前にご案内します。関心のある方は、入学後から語学（特に英語）のスキルをバランスよく伸ばし、副専攻の登録・履修に備えましょう。

CR（Community Regeneration）副専攻

●目的　：大阪を拠点として、変化し続ける地域・社会の問題を解決するとともに、その発展に貢献できる人材を育成する
●キー演習１：地域実践演習（GATSUN）※初年次向け
●キー演習２：アゴラセミナーIa／Ib／II ※2年次以降向け

今年度の地域実践演習履修希望者（1回生）向け説明会が開催される予定です。CR副専攻登録には地域実践演習の受講が必須ですので、希望者は必ず参加するようにしてください。
説明会については、全学ポータルサイトおよび市大COC事業サイト（https://www.connect.osaka-cu.ac.jp/coc/）にて事前にご案内します。
関心のある方は、全学共通科目の中から大阪・地域にかかわる科目を積極的に学び、副専攻の登録・履修に備えましょう。

English Café

全学共通教育棟５階

English Caféには9台のPCが設置されているほか、英語の新聞やCD付き雑誌などが置かれており、Café内で自由に使用可能。
英語を学びたい学生であれば、だれでも自由に利用できます。

Leigh 先生

Jacobs 先生

Chen 先生

English Café Talk

English Caféでは、ネイティブの先生と自由におしゃべりをして英語の力をつけるEnglish Café Talkという時間を設けています。
月曜、水曜、木曜の午後4時30分から１時間、ネイティブの先生がみなさんをお待ちしています。
なにを話すのも自由。楽しい時間をお過ごしください。

Easter Café Talk 開催!!

4月20日(月) 午後4時30分～

Easter Café Talkでは、担当教員が全員集合。ちょっとしたお菓子や飲み物なども用意されます。
Easterはキリストの復活を祝う欧米では一般的な行事。
このほかにもさまざまなSpecial Café Talkを予定しています。

（画像はChristmas Café Talkの様子）

※Café Talkの内容は変更になる可能性があります。

ALC NetAcademy2

English Caféでも自宅でもNetAcademy2が利用できます。
NetAcademy2は、初級者から上級者まで幅広いレベルに対応したネットワーク型英語自主学習システムです。
ALC NetAcademy2スーパースタンダードコースの概要はこちらから
☞ http://www.alc-education.co.jp/academic/net/course-e/super.html?aid=course

Center Now & Human

大学教育研究センターは「こんなこと」に「こんなメンバー」で取り組んでいます!

FD活動

（1）FD研究会（年１回）

FD研究会は、大阪市立大学における教育の向上を図るための学内外の教育改善・FDの取り組みの紹介や、本学の教育のあり方に関する全学的な情報共有や議論を深める場として設定されています。例年、100名前後が参加してきた大きな研究会です。2014（平成26）年度、第12回の全体のテーマは「学習支援・学生支援の充実にIRを生かすには」でした。

（2）教育改革シンポジウム（年1～２回）

教育改革シンポジウムは、大学をめぐる多様な課題について、大学内外の情勢を鑑みながら全学的に考えを深めることを目的に開かれています。2014（平成26）年度は、第21回「日本型４学期（Quarter）制について」（講師：早稲田大学　田中愛治先生）、第22回「グローバル化への積極的対応と初年次教育・全学共通教育改革」（講師：東北大学　羽田貴史先生）をテーマに開催しました。

（3）FDワークショップ・大学教育研究セミナー（年数回）

FDワークショップと大学教育研究セミナーは、ワークショップ形式またはラウンドテーブル形式等をとり、主に学内の参加者間で授業デザイン事例など教育実践事例や大学教育に関する研究活動の成果の紹介とそれらについての意見交換を行う場として設定されています。

研究成果の発信と広報

（1）大阪市立大学大学教育研究センター紀要『大学教育』

主として本学の教育に資する研究成果の発表の場として、学内はもとより全国から投稿を募り、年に１～２回発行する査読付き学術雑誌です。センターのFD活動・研究活動の報告の場でもあります。

（2）大学教育だより & Un roseau（アン ロゾ）

教員および学生を対象として、大阪市立大学におけるさまざまな教育への取り組みをまとめた広報誌『大学教育だより』を年１～２回発行してきました。また、大阪市立大学での学びの道しるべとして全学共通教育総合教育科目ガイドブック『アン ロゾ』を発行し、学生のみなさんに配付してきました。2006年度からこれら2冊を合冊として、より充実した内容として発行し、一層幅広く配付しています。

センターの研究活動

（1）教育課程のあり方・示し方及び教育成果の評価に関する研究

教育の成果を適切に評価することは、教育のさらなる充実を求めていく上で重要です。評価を行うためには、カリキュラムの目標と構造が明確になっている必要があります。大阪市立大学では各学部・学科、各研究科・専攻の学位プログラムの３ポリシーと学士課程の学修マップを公開し、その改良も行ってきました。そして大学が平成27年度に受審する機関別認証評価のための自己点検評価書の作成に協力することを通じて、本学の教育成果のトータルな把握に努めています。例えば学士課程と大学院課程の在学生と卒業生・修了生へのアンケート調査を設計し、実施に協力を行いました。来年度には調査結果を取りまとめる予定です。

（2）教育実践・カリキュラムの開発と評価に関する研究

①初年次教育関連：現在の日本では、大学に入学する学生のほとんどが10代終盤の青年です。そのため特に初年次段階の教育において、青年期の発達を支え、中等教育から大学教育への学びの転換を確かなものにしていく役割が期待されます。このことを踏まえて、今後の４学期制が導入された場合の初年次教育カリキュラムのあり方に関する検討を行い、授業実践も行いつつ授業の研究開発を実施しています。

②「副専攻」プログラム関連：2015（平成27）年度より、大阪市立大学には2つの副専攻が正式に発足します。ひとつは、グローバル社会で生き抜く基礎力を育成するGlobal Communication副専攻、もうひとつは、地域に根差し、地域で活躍できる人を育成するCommunity Regeneration副専攻です。これらの副専攻は、どんな専門分野を専攻していても、本人に余力と能力と意欲がある限り履修することが可能な全学的副専攻です。センターは、これまでに行ってきた教育評価研究と実践を足掛かりに、副専攻カリキュラムデザインとシステムデザイン、および修了認定にかかわる評価方法等の策定を支えています。

③大学院共通教育関連：大学院の研究科を超えて履修可能な大学院共通科目を平成27年度から立ち上げるために、制度の構築や新しい科目の開発にセンターが関わっています。

（3）本学の教育改善・FDに関する調査研究

本学では、FD（ファカルティ・ディベロップメント）を、本学の学生が真に学ぶ教育の高い質の維持と一層の向上のための、構成員全体（教員・職員・学生）の自律的で組織的な取組として捉えています。センターでは、全学の教育改善・FDを企画推進するとともに、近年急速に活発化している各学部等の教育改善・FDの取組への協力支援も行っています。また、本学教員の教育・FDの日常的活動状況や意識の調査・分析なども行うとともに、集まった教育実践事例をもとに、教員相互に活用し合えるWEBデータベースも開発・公開しています。

（4）その他、学内の教育研究・開発ニーズに基づく研究

上記以外に、以下①～③のような、学内ニーズに基づく各種調査・研究活動も行っています。①入学者追跡調査：市大に入学した学生の皆さんが在学期間に学び、卒業していくプロセスをたどることで市大の教育の課題を浮かび上がらせ、選抜方法や教育の改善に結びつけるために実施しています。②将来、大学教員をめざす大学院生のための大学教育実習制度の構築と実施に協力したり、③大学院生とその卒業生に対するキャリア開発支援のプロジェクトを推進したりもしています。

大学教育研究センター紹介

RDHE Osaka City University Center for Research & Development of Higher Education

大阪市立大学 大学教育研究センター

大阪市立大学 大学教育研究センターは、大学を取り巻く新しい環境の中で、社会の進路を見据えた大学教育のあり方を実現することを目指して研究と開発をすすめるために設立されました。

以下の運営体制（左図）のもと、３本の研究の柱を基本に据えつつ相互に強く関連をもつ各種プロジェクト（右図）に取り組んでいます。

大学教育研究センターの研究

大学教育研究センターの運営体制

所長　教育・学生担当副学長

大学教育研究センター
副所長（専任研究員）
専任研究員・兼任研究員

教学・FD部門	評価部門	調査・研究部門
全学FD 横断型教育	学修評価 大学評価	調査研究 教学IR

大阪市立大学大学教育研究センター規定第３条（事業）

(1)大学教育に関する**研究、調査、企画、提案、及び提言**に関すること
(2)大学教育に係る**点検、評価及び改善**に関すること
(3)各部局の**FD活動等**の状況把握及び全学的な活動の各部局への周知等に関すること
(4)**その他**前条の目的を達するために必要な事項

高等教育の制度やその役割についての研究

（1）学士課程教育システムのあり方
（2）学生相談・学習相談システムのあり方
（3）社会における大学のあり方
（4）生涯学習社会における大学のあり方

全学的FD活動 各種研究プロジェクト

カリキュラム・教育方法の開発に関する研究

（1）学士課程のカリキュラムおよび教育方法の開発
（2）初年次教育カリキュラムのあり方
（3）授業改善支援システムのあり方

大学教育の評価および教員評価のあり方に関する研究

（1）大学教育評価のあり方
（2）大学教員評価のあり方
（3）FD活動のあり方

大学教育研究センタースタッフの紹介（平成27（2015）年3月現在）

■所長

桐山 孝信
副学長

■専任研究員

大久保 敦
副所長 大学教育研究センター教授
研究分野：高校大学の接続／科学教育／古植物学

西垣 順子
大学教育研究センター准教授
研究分野：大学教育の評価に関する研究／教育心理学

飯吉 弘子
大学教育研究センター准教授
研究分野：社会における大学のあり方に関する研究／教育学／大学教育史

渡邊 席子
大学教育研究センター准教授
研究分野：教育支援システムの開発／キャリア教育／社会心理学

平　知宏
大学教育研究センター特任講師
COC教務コーディネーター
研究分野：データに基づく教育改善／認知科学

■兼任研究員

小林　哲
経営学研究科准教授

北原　稔
経済学研究科准教授

中島 義裕
経済学研究科教授

高田 昌宏
法学研究科教授

山崎 雅人
文学研究科教授

井狩 幸男
文学研究科教授

海老名 剛
文学研究科准教授

福島 祥行
文学研究科教授

高橋　太
理学研究科教授

飯尾 英夫
理学研究科教授

荻尾 彰一
理学研究科准教授

谷口 与史也
工学研究科教授

鳥生　隆
工学研究科教授

広常 真治
医学研究科教授

廣田 麻子
看護学研究科講師

永村 一雄
生活科学研究科教授

三船 直子
生活科学研究科教授

大西 克実
創造都市研究科准教授

■事務局

垣谷　篤
学生支援課長

富澤 信介
学生支援課長代理

福井 恵美子
学生支援課員

編集後記

大阪市大の教育的取組や学習活動に関する広報誌『大学教育だより』と全学共通教育総合教育科目ガイドブック『アン ロゾ』、そして別冊の『新入生のための授業選び案内』を今年も発行することができました。学生の皆さん― とくに新入生の皆さんには、是非ゆっくり目を通して、大学での学修の道しるべに、してもらえればと思います。

『大学教育だより』「VOICE」欄では、商学部と生活科学部（研究科）の学生の皆さんが、食育を通した地域貢献の実践型学習の経験を相互に紹介し合い、互いの学びや課題へのアプローチの仕方の違いについて話し合ってくれました。食の楽しさや食の基本知識・食習慣・食育の重要性などについて互いに学び合う良い機会ともなりました。各部局の教育の取組紹介欄では、経済学部・法学部・理学部の３つの部局が多様できめ細かい教育の取組の紹介を、市大ニュース欄では、English Caféの紹介や2015年度から始まる副専攻制の説明を掲載しています。総合大学で学べる良さを実感するためにも、他学部の記事や全学に開かれた新しい制度の記事も是非読んでみて下さい。

『アンロゾ』は、副学長で教育担当部長の井上先生、工学研究科の鳥生先生が、学生の皆さんに、大学での学びのあり方について語りかけて下さっています。是非こちらも読んでみて下さい。　（飯吉）

編集委員：飯吉 弘子・小林 哲・永村 一雄